

---

# 満蒙開拓平和記念館における 記憶の表象と継承

～高校生による「博物館」学習の実践事例～

佐藤 竜之

啓明学園中学校 高等学校教頭

---

## 1. はじめに

戦後80年を経て、戦争体験者のオーラル・ヒストリーの収集による戦争の記憶の収集・継承もほぼ終わりが見えてきた状況になってきた。そのような中で、戦争体験者で、移民経験者でもある満蒙開拓団の記憶についても、オーラル・ヒストリーを収集する段階から、その記憶をいかに継承していくかが焦点となってきている。さらに、そのような記憶の表象と継承の役割を担う「記念館」や「資料館」などの「博物館」の役割は、その重要性がより一層増すことになると考える。

満蒙開拓団における戦争体験の記憶の継承と、それに基づく平和学習の重要性は述べるまでもない。また一方で、移民としての性格を持つ満蒙開拓団の記憶をいかに表象し、いかに継承していくのかについても、過去の記憶をいかに継承するのか／されるのかといった問題系につながる大きな課題であると考えている。

## 2. 本研究の目的・意義

### 2-1. 本研究の目的

本研究は、近代日本の人の移動の一形態である満蒙開拓団の歴史が、「博物館」においてどのように展示／表象され、その展示／表象を来館者——本研究においては高校生を対象とする——は、どのよう

に受容し、継承しようとしたのかについて明らかにする授業実践の報告である。

今回の授業実践では、勤務校における夏期講習において、博学連携の講座を開講し、日本史探究に接続する授業の一環として「博物館」学習を実施した。全国で初めて満蒙開拓団をテーマにした民間施設の「博物館」である満蒙開拓平和記念館（以下、本記念館とする）における授業実践を通じて、高校生は「博物館」における展示の意味をどのように受容し、継承しようとしたのかについての分析を行う。

本研究では、「博物館」において、どのように歴史が表象され、継承されていくのかについての分析に際して、アライダ・アスマンの「想起の文化」の概念を参照する。アスマンは、モーリス・アルヴァックスの「集合的記憶論」を引き継ぎ、「想起の文化」という概念を提唱している。

今回の研究においては、アスマンが提唱する概念の中でも特に、「想起の文化」の要素の一つである「文化的記憶」の概念に焦点をあてる。この「文化的記憶」とは、アスマン（2019）において「〈文化的記憶〉という抽象的な概念は、したがって、痕跡の保存、資料のアーカイヴ化、芸術や遺物のコレクション、それらをメディアや教育で仲介して再活性化することといった、幅広く多様な文化的実践を指している。」と定義されている。

アスマンが指摘するこのような機能が、本記念館においては、どのように作用しているのか。さらに、本記念館が表象する記憶が、来館者にはどのように

受容され・継承されていくのか。このような「文化的記憶」を分析するための一事例を提示するものでもある。

本記念館は、戦争体験の学習や平和学習の学びの場として位置付けられ論じられることが多い。ただ一方で、満蒙開拓団は「人の移動」の一形態としても位置付けることが可能である。「満州農業移民」や「満州移民」、「満州青年移民」と表現されるように、移民としての経験をもつ満蒙開拓団の人々の、出移民の経緯および帰還・引揚後の日本での生活といった「人の移動」の記憶がどのように表象され継承されるのかといった点についても論じることが可能であると考えられる。

本研究は、以上の経験を持つ満蒙開拓団の記憶が、どのように継承されていくのかを明らかにするための実践的な研究事例の一つになるとも考えている。

また、もう一つの観点としては、学習指導要領において提示されている博学連携の授業実践事例の一つとして、満蒙開拓団を題材とした事例を報告するものである。

## 2-2. 満蒙開拓団を題材とする意義

本研究の授業実践および本記念館での学習の対象とした満蒙開拓団は、人の移動における「加害と被害」「排除と包摂」を分析する上で重要な題材である。

第一に、国民国家形成に際して策定された「境界」を、近現代における「日本人」がどのように、その「境界」を超えて移動したのか／還流したのかについて分析が可能な題材の一つだからである。第二に、その移動を通じて戦後の日本社会にどのような「境界」が生み出されたのかについても捉えることが可能となる対象だからである。その上で、「境界」の変更による「人の移動」と、その移動に伴う「加害と被害」「排除と包摂」の在り方について表象されている「博物館」である本記念館における記憶の表象と継承について分析する。

## 3. 先行研究の検討

### 3-1. 満蒙開拓平和記念館について

記憶の表象と継承の場として、本記念館そのものを研究の対象としたものは、管見の限り多くはない。今回の研究においては以下の二つを代表的な先行研究として提示する。

一つ目が、山本（2022）「過去と対話する下伊那の歴史実践」である。この研究においては、本記念館を、「平和博物館」の文脈に位置付け、地域とともに地域史を描くパブリック・ヒストリーの事例として紹介しており、「平和博物館」におけるパブリック・ヒストリーの実践という観点からの研究を行っている。ただ、山本の研究においては、本記念館が表象した記憶を、来館者がどのように受け取ったのかといったことについては分析の対象とはしていない。

二つ目として、村田（2022）が挙げられる。この研究は、日本国内の「満洲」関連の博物館と中国東北部に残る「満洲国」の博物館の「記憶の在り方」と、そこを訪問・観光するという行為についての考察を行った研究である。「都市の観光」という観点から日中の博物館を位置づける研究であり、特に中国側の博物館の記述が厚いという特徴がある。

この研究においては、満蒙開拓団を送り出した地に「博物館」があるということのみをもって「記憶の場」が形成されているとの指摘に留まっていると捉えられる。さらに、本記念館における展示物に対する考察もほぼ無い。もちろん、記憶の継承という点についても分析の対象外としている。

以上を踏まえ、本研究では、上記先行研究において分析がなされていない、来館者——本研究においては高校生に限定される——がどのように本記念館における表象を受容したのかという点について、その一端を明らかにしようとするのである。

### 3-2. 満蒙開拓団について

今回実施する授業実践は、筆者が2021年度及び2024年度の一般財団法人日本私学教育研究所の委託研究員として実施した研究である、佐藤（2021）

及び佐藤 (2024) がベースとなっている。そのため、今回の授業実践の開発においても上記研究と同様、以下に詳述する先行研究を参照している。

まず、「人の移動」と満蒙開拓団という観点については、日本帝国の形成と人口移動及び人口還流という観点から満洲農業移民を題材として扱っている研究である蘭 (2008) や蘭 (2013)、蘭・川喜田・松浦 (2019) を参照している。また、満洲農業移民の歴史的な経緯や、地域からの送り出し／受け入れの詳細については、加藤 (2017) や細谷 (2019) を参照した。さらに、下伊那の地域からの送り出し、引揚については、飯田市歴史研究所 (2009) を参考にした。

つぎに、引揚をめぐる先行研究としては、戦後引揚については若槻 (1995) と、満洲農業移民の引揚及び引揚全般の問題について整理を行う際に参考としたのは加藤 (2020) である。さらに、引揚者の戦後の再入植の問題に焦点を当て、引揚者がどのように日本社会から「排除」されたのかという視点については、道場 (2008) や森 (2019) を参考とした。

以上の先行研究を参考にしつつ、今回の授業実践に即した学習題材の選定を行った。選定した題材については、授業実践の項目において詳述する。

## 4. 授業デザインについて

### 4-1. 「逆向き設計」と「概念的理解」

今回の授業実践における授業デザインに際しては、社会構成主義の観点にたち、以下の二つの理論を参照してデザインを行った。

コンピテンシーの育成及び探究的な学びを実践するための授業デザインの方法論として、Wiggins・McTighe・西岡 (2015) の「逆向き設計」<sup>1)</sup> の理論を用いた。学習における生徒のコンピテンシーの育成という観点より、いわゆる「歴史的思考力」(資質・能力) を活用しながらの授業展開を構想した。具体的には、生徒が資史料を読み取り、それにもとづいて歴史的な事象を考察するといった授業展

開である。また、そのようなコンピテンシーが活用できる授業展開を実施するため、「本質的な問い」<sup>2)</sup> を提示し、その問いに対して、生徒が資史料をもとに自らの考察をまとめるという展開を構想した。

この「本質的」な問いであるが、「逆向き設計」において提示されている「本質的な問い」では、問いの構造化がなされずらく、生徒が具体から抽象へと思考の一般化を図る構造としては、最初に提示する概念が大きすぎるきらいがあった。

そのため、今回の授業実践においては Erickson・Lanning・French・遠藤・真理子 (2020) の理論を活用し、「事実に関する問い」、「概念的な問い」、「議論を喚起する問い」を提示するという方法論を用いた。これにより、生徒が授業展開の中で段階的に、習得すべき概念を理解し、「概念的理解」習得が可能となると考え、この方法論にもとづき、3つの問いを設定した。

また、佐藤学の「学びの三位一体論」を活用し、「対象との対話」・「自己との対話」・「他者との対話」という三つの対話を用いた学びのデザインを行った。

### 4-2. 博物館学習と日本史探究の接続について

今回の授業実践が、学習指導要領にどのように位置づくのか、日本史探究の授業との関連、またその意義について、以下詳述する。

まず、日本史探究における授業の題材として、満蒙開拓団について焦点を当てるのは、以下の理由によるものである。

今回の授業実践で扱う学習課題は、学習指導要領の日本史探究の項目における「内容の取扱」の(1)のイ、ウ、エ、の目標に合致するものである<sup>3)</sup>。

第一点として、(1)のイについて、歴史総合と日本史探究とを接続する題材としての満蒙開拓団の有用性である。

歴史総合では、「自由・制限」等の5つの観点を設定されている。この中の一つである「統合・分化」の観点到置き換え可能なものとして「包摂と排除」という観点の設定が可能であると考え。この「包摂と排除」という観点到きた時、近代日本の「人の移動」というテーマ設定は、歴史総合におけ

る授業の題材としても有効性を持つ。この点については、すでに各出版社の歴史総合の教科書において、移民についての項目が設定されていることで明らかである。

一方、日本史探究の近現代分野において非常に有効なテーマであると共に、多くの素材があり多様な授業展開が可能であると考え。その中で最も有用性が高い題材が、満蒙開拓団であると考え。

第二点として、(1)のウについては、「博物館や公文書館、その他の資料館などを調査・見学したりする」との記載があり、教育活動の中における博物館等の活用が謳われている。さらに、「社会に開かれた教育課程」の要請も含め、博学連携の学びを実践することは、それらの要請に応える重要な実践であると考え。

第三点として、(1)のエについてである。現在の勤務校は、学年の約30～35%が帰国生や「国際生」——外国籍や、家庭で多言語環境にある生徒——と呼ばれる生徒が在籍する学校である。そのため「引揚者」を「帰還移民」の一形態として捉える視点をもとに授業を行うことは、本校の生徒にとって「身近な」「切実な」題材であり、生徒の実際の生活経験に基づく、興味関心を喚起しやすい題材であると考えた。生徒の実態に即した学習題材の設定が(1)のエにおいて求められており、勤務校の実態に合わせた時、満蒙開拓団を学習題材として設定することの意義が、この点においても見出せる。

さらに、生徒の実態に基づいた課題設定と、この授業実践を通して、「日本」における「包摂と排除」の問題について、同じ「日本人」を題材に問い直すことで、現代における「人の移動」や「境界」の問題について生徒が考えるための視点を提供することが可能となる。これは、現代的な諸課題について生徒が考察できるようにするという、学習指導要領の要請にも応えるものであると考え。

この、「境界」や「包摂と排除」といった概念は、日本史学習のみにとどまらず、他の事象に転移可能な概念である。このような中核的な概念を中心とした授業デザインによって教科学習を実施することで、「総合的な探究の時間」等において生徒自身がたて

た問いを解くための概念として転移可能なものとなり得るため、教科横断的に活用することが可能であると考えている。そのため、このような普遍性を持つ概念について、日本史学習を通じて習得することの重要性も射程に含めている。

## 5. 2024年度の授業実践

### 5-1. 夏期特別学習の目的と実施内容

本研究は、筆者の勤務校における2024年度の夏期特別学習——いわゆる夏期講習——において実施したものである。本研究における授業実践は、筆者自身が授業者として実施したものである。また、今回の夏期特別学習の本講座には6名の生徒が参加した。内訳は高校3年生が5名、高校2年生が1名である。また、本講座は自由参加の講座であるため、参加した6名は今回の講座内容に興味・関心を持って参加した生徒たちである。

今回の夏期特別学習においては、以下の内容について生徒に理解してもらうことを授業実践の目的として設定した。

アスマンの「想起の文化」における「文化的機能」を参照し、満蒙開拓団の多声性について生徒に意識してもらうことを第一の目的とした。

「大文字の歴史」と同様、「満蒙開拓団」という事象においても、一つのストーリーに回収されるような代表的な声が存在する可能性がある。しかし、満蒙開拓団においても多様な経験があり、その経験が「博物館」に展示されていることを暗示的に示すことも目的とした。

その多様な経験について、それぞれの生徒が、「対象との対話」・「自己との対話」を通して受け止めた上で教室内において共有することで、教科書には詳述されない歴史の出来事を認識するとともに、「博物館」においては、どのような声が展示／表象されているのかに気づくことができるような授業デザインをおこなった。

ただし、そのような意図を持った授業デザインであることを、生徒に明示的に提示したわけではない。

そのため「博物館」の研修において、生徒がこの点について自覚的に意識して展示を見たわけではない。

## 5-2. 事前学習 第1時の学習内容 ——対象・自己との対話——

本記念館での学びのための事前学習として、7月24日(水)に夏期特別学習の一環として、5・6時限目(各50分授業)に満蒙開拓団についての理解を深めるための授業を実施した。

7月24日(水)に実施した授業実践の1時間目は、各生徒に、満蒙に渡った人々のオーラル・ヒストリーの記録を学習資料として渡した。それぞれの生徒が異なる体験者の声に触れ、それを共有することで、「満蒙開拓団」の多声性についての理解を深めることを目的とした。

15分ほど時間をとり、各生徒が資料を読み込む時間とした。その後、自分が読んだ資料の中から、その人物がどのような経験をした人なのか分かる情報を書き出す作業を行った。自分が読んだ資料の人物が、どのように満洲に移動し、どのような経験をした人物なのかの理解を深めるとともに、その情報を他の生徒と共有する際の基礎情報とすることを目的として設定した(図1)。満蒙開拓団の多声性を参加者で共有することで、満蒙開拓団の実態を象ろうとしたものである。さらに、その経験を歴史の中に位置づけるという作業を組み込んだ。

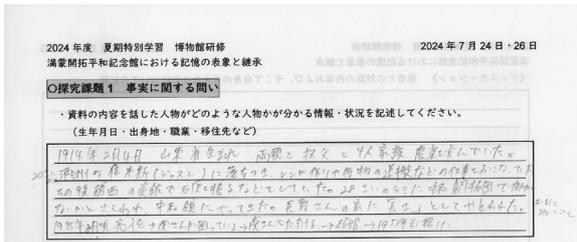


図1

また、この課題には、資料からどのような情報を読み取るのかといった歴史学習のスキルも意図したものである(図2)。さらに、学習の前後において、生徒自身の知識や思考の在り方について、どのような変容があったのかについて自分自身が認識できるように、学習前の段階における「本質的な問い」に対する生徒自身の考えを記述する学習課題を設定し

ている。

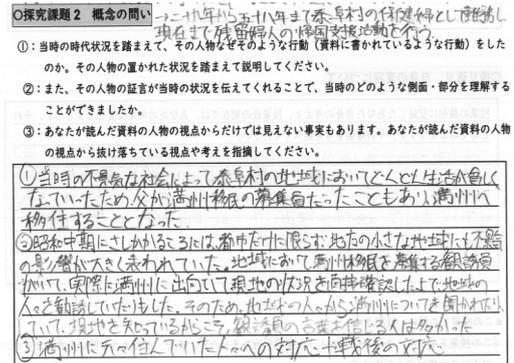


図2

本授業実践においては「本質的な問い」として、「あの時代に生きていたら、あなたはどうしましたか」という問いを設定した。これは、本記念館の「平和な未来へ 今、私たちができること」のコーナーに掲示してある「未来に向かって」の一文と同じものである。この一文を本質的な問いとして設定した意図は、今回の学習目標である満蒙開拓団の多声性を自分ごとに引き付けて理解することが可能になると考えたためである。

今回の授業実践における学習課題の資料として選定したのは、訪問先が下伊那であること、また資料としての充実性を踏まえ、満洲移民を考える会が編集した『聞き取りと調査研究 下伊那から満洲を考える』のシリーズと、満蒙開拓を語り継ぐ会が編集した『下伊那のなかの満洲』のシリーズを学習素材の中心とした。設定した学習題材および授業で使用したワークシート、また、参加生徒へ実施したアンケート調査の一覧については、本校のHPに掲載をしている<sup>4)</sup>。

## 5-3. 第2時の学習内容 ——他者との対話——

第1時の取り組みをもとに、各生徒は自分の資料をそれぞれ発表し、6名がそれぞれ異なった満蒙開拓団の体験を共有した。また、事前に満蒙開拓団の入植の地図を渡しており、資料に記載された人物が、どのような場所に住んでいたのかの確認も行った。

発表された情報をもとに、生徒全員で満蒙開拓団とはどのようなものであったのかについて自らの考

えをまとめた。その後、教員からの解説として、生徒の発表をもとに、再度「境界」や「排除と包摂」における主体の概念についての解説を行った。

最後に、本記念館より事前学習用としてお送りいただいたDVD「満蒙開拓の真実～国策移民の実像と悲劇～」(20分間)を学習の振り返りを兼ねて視聴し、事前学習を終了とした。

## 6. 満蒙開拓平和記念館における学び

以上の事前学習を踏まえた上で、7月26日(金)に本記念館において「博物館」見学の学びを実施した。「満州国」に渡った約27万人の満蒙開拓団のうち、約3万3000人と全国で最も多くの満蒙開拓団を送り出した長野県において、そのうちの約4分の1にあたる約8400人が、本記念館のある下伊那の地域から送り出された。県下最大の送り出し地域となった場所にある本記念館には、今回参加した生徒で訪問したことがある生徒はいなかった。参加生徒6名にとっては、初めて訪問する場所である。

### 6-1. 常設展の構成について —記憶の表象の分析—

本記念館の常設展の展示は8つのパートで構成されている。具体的には、「1. 序章 時代を知る タイムトンネル」、「2. 大陸へ 映像で見る満州」、「3. 新天地満州 希望の大地」、「4. 敗戦と逃避行 絶望の彷徨」、「5. 証言 それぞれの記憶」、「6. 引揚げ・再出発 失意の帰還」、「7. 望郷 山本慈昭と残留孤児」、「8. 平和な未来へ 今、私たちがができること」の8パートである。

これらのパートを通して本記念館が表象しようとしているのは、満蒙開拓団の「加害と被害」の記憶である。ただ、ここにおける「加害と被害」とは、日本と満州という単純な二元的な「被害と加害」の記憶ではない。

移民として送り出された「被害」意識、悲惨な引揚げの体験やシベリア抑留体験からくる「被害」意識、引揚げ後に、故郷に住むことが出来なかった「被害」意識。一方、満州に住む人々の視点からは、「植民

地の先兵」としてやってきた開拓団に土地を奪われた「被害」。このように、日本・満州の双方の「被害」を視野に入れている。

一方、「加害」という観点でも同様である。開拓団による満州への「加害」もあれば、引揚げに際しての満州の人々からの「加害」も描かれる。さらに、開拓団を送り出した側の「加害」意識についても描き出す。そして、そのような歴史が、どのような要因によって、「誰に」よって推し進められたのかについても言及する。地域の人々が「単なる国策の被害者」ではなく、その政策を「誰が」推進したのか。そして、その政策の推進を、「誰が」支えたのか。さらに、戦後においては、「誰が」帰ってきた地域に受け入れられたのか、もしくは受け入れなかったのか。「誰が」という、満蒙開拓団に関わった全ての人々の歴史に対しての責任の主体を問い直そうとする視点を提供する。

満蒙開拓団という歴史を、どのような時代背景のなかで、「誰が」作り出したのか。そして、その史実から何を学ぶ必要があるのか。といった点について来館者に問いかける表象となっていると考える。

このような「被害と加害」という視点は、引揚げについての記憶を表象する京都府にある舞鶴引揚記念館<sup>5)</sup>には見られないものである。同様に、海外移住についての記憶を表象する神奈川県にある海外移住資料館<sup>6)</sup>についても指摘出来る。

特に、海外移住資料館においては、その展示の中で「定住移民(移住民)のはじまり」というパートにおいて、「南米に向かう国策移民」という項目を設定している。しかし、時代は異なるが、同じように「移住民」であり「国策移民」でもあった満蒙開拓団には一切触れられていない。

さらに、満蒙開拓青少年義勇軍との関連で言及するのであれば、茨城県にある水戸市内原郷土史義勇軍資料館<sup>7)</sup>においても、このような視点における記憶の表象はなされていない。

まさに、君塚仁彦がベンヤミンの言葉を引いて指摘する通り、本記念館は「歴史のなかに登録されなかった人々の記録や記憶を復活させようとする」「歴史を逆なでする」博物館の一つである言うこと

が出来ると考える。

## 6-2. 見学の流れと各パートの滞在時間

当日の記念館見学の概要であるが、当日は午前12時前に本記念館に到着した。生徒の帰宅時間の関係もあり、14時10分には本記念館を出発する必要があったため、今回の滞在可能な時間は約2時間であった。

今回の見学にあたっては、事前に展示見学の際の案内ガイドを依頼しており、当日は事務局長の三沢亜紀様の解説のもと、館内の展示見学が行われた。

各パートの滞在時間を以下に記す。

- ・本記念館の解説及び開拓団の概説 12：05-12：20
- ・1. 序章 時代のタイムトンネル 12：21-12：32
- ・2. 大陸へ 映像で見る満州 12：33-12：36
- ・3. 新天地満州 希望の大地 12：37-12：59
- ・4. 敗戦と逃避行 13：00-13：15
- ・5. 証言 それぞれの記憶（解説なし）
- ・6. 引揚げ・再出発 失意の帰還 13：16-13：30
- ・7. 望郷 山本慈昭と残留孤児 13：30-13：40

その後、14時過ぎまで自由見学の時間とし、各自が自分の興味関心のある展示についての見学を行った。

## 7. 記憶の受容と継承 ——参加生徒のアンケートより——

今回参加した生徒6名に対して、表1の通りのアンケート調査を実施した。また、各アンケート項目の設定目的は次の通りである。生徒の「歴史」・歴史学習に対する興味・関心に関わる内容（Q1～Q5）、学習内容としての知識・理解に関する項目（Q6～Q8、Q10、Q12）、本記念館の展示をどのように受容したのかに関する項目（Q9、Q10、Q12、Q13）本記念館の展示内容をどのように継承しようとするのか/したのかについての項目（Q10、Q13）として設定した。

このアンケート調査の分析の結果から、本授業実践の成果として参加生徒6名が、満蒙開拓団につ

いて、また満蒙開拓団を通して、どのように歴史を理解したのか。また、事前学習を経た上で、本記念館の表象をどのように受容し、継承しようとしたのかについて的一端を明らかにできると考える。

紙幅の関係で、生徒へのアンケートの調査結果の一覧については掲載できないが、本研究の中心となる部分のみ取り上げ、考察を加えることとする。

表1 参加生徒へのアンケート質問項目一覧

Q1: 歴史の授業において歴史を学ぶことに興味・関心はありますか。 (5: 非常に興味がある 4: 少し興味がある 3: 普通程度にあると思う 2: あまり無い 1: まったく無い)
Q2: 興味・関心があれば、どのような点ですか。自分の興味・関心がある人物や出来事、時代があれば説明してください。(自由記述・調査書まで可)
Q3: 博物館で歴史について学ぶことに興味・関心はありますか。(5: 非常に興味がある)
Q4: いままで忘れて記憶に残っている博物館(「記念館」や「新設館」なども含む)は、どのような博物館でしたか。説明できる範囲で構いません。(自由記述・調査書まで可) (訪れた博物館が無い場合は「無し」と書いてください。)
Q5: 博物館に行ったことがない、博物館での学びに興味がない場合には、以下にその理由を書いてください。
Q6: 【事前学習を実施する前の段階で、この質問に回答してください。】満蒙開拓団について、現時点であなたが知っている内容・出来事・言葉について、知っていることを全て書き出してください。(自由記述・調査書まで可)
Q7: 【事前学習の後、博物館が移る前の段階で、この質問に回答してください。】満蒙開拓団について、現時点であなたが知っている内容・出来事・言葉について、知っていることを全て書き出してください。(自由記述・調査書まで可)
Q8: 満蒙開拓団について博物館を訪れてみて初めて知った内容・出来事・言葉について書き出してください。(自由記述・調査書まで可)
Q9-1: 満蒙開拓平和記念館を訪れた際の質問です。以下の各項目に答えてください。 9-1: 満蒙開拓平和記念館の中において、どの展示が一番興味を持ちましたか。 展示名もしくは展示の内容:
Q9-2: なぜその展示が一番興味を持ちましたか。
Q9-3: この博物館は、なぜその展示が置かれていると思いますか。あなたが考えられる範囲で構いません。その理由について説明してください。
Q10: この博物館の中で、あなたが自分の子孫(自分の子供や孫やひ孫)もしくは自分の後輩に伝えたいと思う内容は、どの展示内容になりますか。3つ挙げて説明してください。
Q11: あなた自身が今回の学習(事前学習から博物館訪問)を通じて、満蒙開拓団とはどのようなものであったと考えましたか。
Q12: この満蒙開拓団に関わるさまざまな物語は、いま私たちの社会やあなた自身と、どのようにつながっていると考えますか。もしくはまったく関係ないと考えますか。あなた自身の考えを述べてください。(自由記述)
Q13: 本日、満蒙開拓平和記念館で見たものや学んだこと、また考えたことなどを他の人(保護者・友人など)に話したりしましたか。また差し支えなければ、どのような内容のことについて話したかを説明してください。

前述の通り、「博物館」における記憶の表象をどのように生徒が受容したのかという点を明らかにするために、以下の三つの質問(Q9-1からQ9-3)を設定した。以下、生徒への質問項目については、ゴシックで表示する。

**Q9: 満蒙開拓平和記念館を訪問した際の質問です。以下の各項目に答えてください。**

**9-1: 満蒙開拓平和記念館の中において、どの展示が一番興味を持ちましたか**

《各生徒の回答 生徒 A～F》
A: 新天地満洲にあった地図
B: 開拓団の逃避行・収容所生活
C: 望郷 山本慈昭と残留孤児 残留孤児の帰国を支援した山本慈昭さんが、どのような活動をしたのか。残留孤児が書いた山本さん宛の手紙
D: 当時の証言者が展示されていたところ
E: 満蒙開拓青少年義勇軍
F: 満州に行った人の体験談

この質問項目において、生徒D・Fは、証言者の

映像資料に注目した。この生徒達は、次の質問項目において、それぞれ以下のように回答している。

また、生徒Cは引き揚げに関して着目していた。生徒Cは、その理由について、次の質問項目の中で以下のように説明している。

**Q9-2：なぜその展示に一番興味を持ちましたか**

C：第二次世界大戦後、アメリカに傘下におかれた日本で、民間組織が中心となって残留孤児の帰国を支援したことを知って衝撃だったため。残留孤児が山本さん宛に手紙を書いたということは、日本に帰りたがっていた、自分の家族の現状を知りたがっていた、ということだと考えられるので、当事者たちの気持ちを考えると、心が痛むし、つい50年ほど前の出来事なのにあまり知られていないから、忘れてはならないとも感じた。

D：映像だったため、どんな人が何をされたのか、リアルだった

F：個人が経験された事が生々しく感じる事が出来たから。

実際に当時の状況について、より「身近に」感じ、理解することが出来る表象として生徒たちは受け止めていたことが読み取れる。

**Q9-3：この博物館では、なぜその展示が置かれていると思いますか。あなたが考えられる範囲で結構ですので、その理由について説明してください。**

B：この自治体が開拓団を出したということから、この地域がこの展示をすることで、このような惨状を生むということを自分たちの教訓として各地域に伝えるため。

この生徒Bは、「記憶の場」としての本記念館が、この場所に存在することの意味について、的確に言い当てている。理論的な部分において村田（2022）が指摘した内容が、実証された例であると言える。

**Q12 この満蒙開拓団に関わるさまざまな物事は、いまの私たちの社会やあなた自身と、どのようにつながっていると考えますか。もしくはまったく関係ないと考えますか。あなた自身の考えを述べてください（自由記述）。**

B：今の日本や国際社会における移民問題への新たな視点を持つことが出来ると思う。もし自分たちが有事の際に、どのようにして生活していくことが最善策かという過剰な考えに対しても、このような実話からくみ取れるものもあると思う。

今回の事前学習においては、明示的に「満蒙開拓団が移民の一事例である」といった提示はしていない。しかし、この生徒Bは、「人の移動」という観点から、満蒙開拓団と現代的な諸課題の移民の問題について考えるという視点を持って、本記念館の展示を受容したことが読み取れる。

**Q13：本日、満蒙開拓平和記念館で見たものや学んだこと、また考えたことなどを他の人（保護者・友人など）に話したりしましたか。また差し支えなければ、どのような内容のことについて話をしたかを説明してください。**

A：家族に満蒙開拓団について話した

D：母親に満州の人々が派遣された分布図の話をしました

E：家族と少し話をしました。満州からシベリアに行った人もいたということ。

Q13の間に対しての生徒の回答の一部である。上記以外の生徒も同様に、今回の本記念館への訪問で学んだことを、「他者に伝える」という行為を行っていた。

「継承」とは、どのような行為なのか。単に「知る」だけではなく、その「知った」ことを、自分以外の人にどのように伝えていくのか。つまり、来館者の行動変容の部分が、いわゆる「継承」といったものに当てはまると考える。

その意味では、参加した生徒の行動変容は「他者への継承」が見られたと指摘できる。その行為・行動変容こそ、記憶の継承の一つに値するものであると考える。

## 8. おわりに ——到達点と課題——

以上、本記念館における学びとその事前学習における授業実践およびそのデザインと、「博物館」における記憶の表象と継承についての実践事例について紹介した。

今回の授業実践におけるアンケートの分析から、高校生たちは学んだ内容を生かして、本記念館における表象の意味を各自なりに読み取っていたことが明らかになった。さらに、その記憶を継承するべく、主には「他者に伝える」という行動変容が見られたことも指摘できる。

今回の授業実践における生徒の変容を見るに、アスマンが指摘する「文化的記憶」の機能が果たされた学びの機会であったと認識している。

一方、課題も残る。事前学習においては、時間が限られたこともあり、概説の解説程度の授業展開しか出来なかった。また、今回の授業実践に参加した6名の生徒は、このテーマに対して興味・関心を持って取り組んだ生徒たちであるため、課題の理解度も高かった部分がある。そのため、このテーマについて事前知識が少ない高校生が参加した場合、より生徒の興味・関心を惹きつけ、学びを深めることが出来るような学習課題の設定や授業展開が必要であると感じた。

さらに、生徒による表象の受容と継承の分析についても、今回のアンケートでは、概要的な部分でしか生徒の実態をつかむことが出来なかった。そのため、参加生徒へのインタビューなどを実施し、より精緻に、生徒がどのように表象の意味を捉え、継承しようとしたのかについての分析が必要になると考えている。今後の研究の課題としたい。

## 【注】

- 1) 「逆向き設計」とは、科目や授業などの学習体験をデザインする際に、より意図的に生徒の学びをデザインするために、学習後の生徒像を設定した上で、学習内容を設定していくためのフレームワークである。
- 2) 「本質的な問い」とは、学習内容以外にも応用可能な概念を理解するために設定される問いで、「はい」「いいえ」などのクローズドクエスチョンではない質問のことを指す。
- 3) 文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）』、2018年、68頁の「第2節 地理歴史」の「第4 日本史探究」の項目における「3 内容の取扱い」の各項目には、以下のように記載されている。まず、項目イは「『歴史総合』の学習との連続性に留意して諸事象を取り上げることにより、生徒が興味・関心をもって我が国の歴史の展開を学習できるよう工夫すること」。また、項目ウは、「年表や地図、その他の資料を積極的に活用し、地域の文化遺産、博物館や公文書館、その他の資料館などを調査・見学したりするなど、具体的に学ぶよう指導を工夫すること」。最後に、項目エは、「活用する資料の選択に際しては、生徒の興味・関心、学校や地域の実態などに十分配慮して行うこと」として、それぞれ規定している。
- 4) 「満蒙開拓平和記念館 事前学習使用プリント及び生徒アンケート一覧」  
<https://www.keimei.ac.jp/jsh/info/6196/>（最終閲覧日 2024年9月28日）。
- 5) 京都府舞鶴市字平 1584 番地 引揚記念公園内に所在し、事業主体は舞鶴市である。
- 6) 神奈川県横浜市中区新港2丁目3-1に所在し、JICA（独立行政法人国際協力機構）が運営する資料館である。
- 7) 茨城県水戸市内原町 1497-16 に所在し、事業主体は水戸市である。

## 参考文献

- ・ Grant Wiggins, Jay McTighe, 2005, Understanding By Design =2015（西岡加名恵訳）『理解をもたらすカリキュラム設計——「逆向き設計」の理論と方法』、日本標準、2012年。
- ・ H. Lynn Erickson, Lois.A Lanning, Rachel French, 2017, Concept-Based Curriculum and Instruction for the Thinking Classroom (Second Edition) =2020（遠藤みゆき、ペアード真理子訳）『「思考する教室」をつくる概念型カリキュラムの理論と実践』、北大路書房、2020年。
- ・ アライダ・アスマン（著）、安川晴基（翻訳）『想起の文化：忘却から対話へ』、岩波書店、2019年。
- ・ 蘭信三（編著）『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』、不二出版、2008年。
- ・ 蘭信三（編著）『帝国以後の人の移動——ポストコロニアリズムとグローバリズムの交差点』、勉誠出版、2013年。
- ・ 蘭信三・川喜田敦子・松浦雄介（編著）『引揚・追放・残留——戦後国際民族移動の比較研究』、名古屋大学出版、2019年。
- ・ 飯田市歴史研究所編『満州移民 飯田下伊那からのメッセージ』、現代資料出版、2009年。
- ・ 加藤聖文『満蒙開拓団——虚妄の「日満一体」』、岩波書店、2017年。

- ・加藤聖文『海外引揚の研究——忘却された「大日本帝国」』、岩波書店、2020年。
- ・君塚仁彦・名見耶明（編）『現代に生きる博物館』、有斐閣、2012年。
- ・佐藤竜之『『本質的な問い』を中心とした歴史総合を見据えた授業デザイン：帝国内の人の移動 満蒙開拓団を題材として』『日本私学教育研究所紀要』57、2021年、45～48頁。
- ・佐藤竜之「探究的な学びによる概念的理解の獲得のための教育実践研究：引揚者の排除と包摂から見る日本近現代史」、『日本私学教育研究所紀要』60、2024年、51～54頁。
- ・細谷亨『日本帝国の膨張・崩壊と満蒙開拓団』、有志舎、2019年。
- ・道場親信「『戦後開拓』再考——『引揚げ』以後の『非／国民』たち」『歴史学研究 No846』、2008年、113～123頁。
- ・村田麻里子「『記憶の場』が再構成する『満洲』——博物館と都市の観光による記憶の継承」『エキシビションとツーリズムの転回』、関西大学経済・政治研究所、2022年、97～148頁。
- ・森武磨「戦後開拓と満州移民——戦後千振開拓組合を事例として」『歴史と民俗』35号、2019年、237～274頁。
- ・山本めゆ「過去と対話する下伊那の歴史実践——満蒙開拓平和記念館」蘭信三・小倉康嗣・今野日出晴（編）『なぜ戦争体験を継承するのか—ポスト体験時代の歴史実践』、2021年、373～381頁。
- ・若槻泰雄『新版 戦後引揚の記録』、時事通信社、1995年。